〝駅長〟三池労組員には誠意をもたん〟
港務所で不当処分

待機時間中に草取り強要

港務所の会社側はさる八月一三日、待機時間中に草取り作業をしないという全く不当な理由をこじつけて富健一さんら五名の三池労組員に出勤停止一〇日から三日という不当処分をかけてきた。またこの一方的な作業指示に抗議した加藤友一郎さんにも時間中の珈制抗議を理由に三日間出勤停止処分をかけてきた。

これはさる八月九日、宮浦駅で機械故障による炭切れということで控所で待機していた富健一さんら五名に西島助役（係員）がきて、機械が動くまで周辺の草取り作業を命じた。

待機中の山村さん（三池労組員）が「組合はそのことを知っているのか？合理化団交の中で話し合われているはずだが組合が承知していないならだめだ」と断った。

西島助役は「ああそうな、技師長巡視だから制服は着ていてくれ」といい、怒った顔で二階に行った。

その後、勤務より帰った加藤さんと富さんが経過を明らかにし組合との話し合いの確認をえるため駅長と話し合った。このとき駅長は「三池労組員の人たちは新労にくらべ生産協力をしてもらわないから誠意を持って話し合わなくてもよい」などと、組合をヒボウするような暴言をはき、その後一方的に処分をかけてきたものである。

抗議したと処分

また港務所の会社側は同じ日に同じく港務支部の珈場分会長黒田栄吉さんにも一方的に出勤停止三日間という不当処分を強行してきた。

黒田さんは工場内の浴場縮少や三池労組員松岡さんの一方的配置転換などに対して数回にわたり係長と交渉をしたもので、いずれも「係長一寸よいですか」と断って話しており会社側のいうように「業務を阻害した」などということは全くデッチ上げである。

抗議スト

このような会社の一方的な処分に対して三池労組はさる八月一七日三川坑大災害に対する会社責任者不起訴への抗議と同時にこのような不当処分に反対し、坑内外各方の時限ストおよび三番方の方別ストに突入した。

小倉山を間のあたりに見る小高い所に面した緑ガ丘の一角に、向日葵地域分会がある。主題は、地域分会でなく地蔵尊だから滑稽である。しかし、ここに紹介する前に、地域分会多いといえども地蔵尊をもつ分会も他にあるまい。その祭りは、毎年残暑がまだまだきびしい八月二四日である。今年も例年にたがわずその地蔵祭がやってきた。というのは、地蔵祭が地域活動の一つに数えられ、児童対策部を中心に、地域分会、主婦会はこの日までには行事に関する諸々の活動を要求されるのである。

古くからのことわざについては多くを語りえないのであるが、その当時の発起人は五人で発足し、いまでは鹿田さんただ一人になっている。そして他の四人がいずれも一、二〇〇名の斗士であったため現在では、当地をはなれて生活をしているのである。地蔵菩薩は昭和二五年八月に当地域に寄贈され、子どもたちを諸災害から守るものとして今日まで多くの人々に親しまれている。また、この日は子どもたちにとっては年に一度の祭りと思ってか、一人一人が大いにはしゃぎ活気があふれる。

この祭りには毎年のことではあるが、はたかぜ巡回映画も加わり祭りを一段と盛り上げる。そして子どもたちには少々のお菓子と地蔵オフダがわたされるのがならわしとされている。分会員、主婦会員も、この日は日々のたたかいをしばし忘れ、子どもたちとともに祭りを楽しむのである。

向日葵地域分会
児童対策部長　大月照月

われら五人組 ⑮

〝みてみぬふりすっとが係員の仕事じゃケン〟

抵抗日誌（上）

本所支部電気分会の五人組は組はあるが改選で組を編成しなおして三ケ月なので討議がまだ定着しないむきもあるが今回は米村組長の五人組を紹介しよう。この組はみなベテランばかりの電気工なのだが、それでもみんなの抵抗の姿勢の中にでてくる少しづつの差が会社側につけ込まれるスキを与えるからと五人組での討議の必要が強調されている。とくに三池労組員の抵抗による成果をはっきりと確認し第二組合員の珈場における抑圧された状態を明らかにするためにこの分会は全部の五人組（五組）で抵抗日誌をつけている。抵抗日誌は組長会議で集約され分会でまとめられている。このメモ化活動がどう行なわれているかを聞いてみた。なおこの分会では「助け合い運動」を分会単位でとりくもうとみんなで討議をふかめている。この運動は単に親切ということでなく「同志が困っているときは助け自分がこまったときは助けてもらう」という同志的考えにもとづくもので、例えば農繁期の手伝いでも、いままで個人的にたのんでいたのを、はっきり規定をつくって分会単位でしようというもので支部では「助け合い銀行だ」と呼んでいる。

【出席者】
米村　稔さん（組長）
松崎　清里さん
谷口　国広さん
秋山　実さん
江崎　勝喜さん

お前たちは知らんでもいい

―珈場の保安問題はどうですか？

―斗争前までは作業中におきた事故など係員がくわしく報告していたし配電の図面も一人づつくれたのに、いまでは図面も、また配電の変更なども一つも知らせない。

―朝のくり込みもボウシンにだけ小さな声でいうだけで全くお前たちは知らんでもいいという態度だ

―電気の場合は保安は何といっても検電ということが第一だがこのような係員の態度を見ならった第二組合員などは、工事前に係員が電気を切りに行くと、切れたかどうか確認もせずにサッサと作業にかかろうとする。「あぶなかやんか」とこっちがいうのでいまはやっと保安が保たれている。

〝やめろ〟とも〝せろ〟ともいわん

―立体作業（上と下とで同時にする作業）はしないようにとは、保安常会で係長も口ではいうが、きのうなどは電柱をまだ穴に十分にうめてしまわないのに第二組合員が登りはじめた。見ている者も、下で仕事しているものもヒヤヒヤするが、能率のことしか考えない係員は〝やめろ〟とも〝せろ〟ともいわんでただ見ているだけ。

―これでケガすれば会社側は「保安常会でもいつもいうとるでしょうが」と答えるだけ。

―事故が起きるので係員に抗議しても「今後は考えときましょう」とか「検討してみましょう」でいつもウヤムヤにさせられる。

―今後は会社がいいのがれ出来ないように、いちいちメモ化することを五人組で実行しよう。

―保安上少々あぶなくともみてみぬふりするとが係員の仕事じゃけん

「自分だけがニラマレル」ではダメ

――こっちも保安は最低の問題だから徹底的にやらんといかん。自分だけがにらまれると思うと勇気がでないので五人組で足なみそろえてやろう。

私の書棚

高椋さんに捧げる

港務　柿坂　敏

高椋さんおめでとう。はげしい差別労仂に耐えながら、いまの三池の労仂者が一冊の詩集を作りあげたということは大変なことであり、それはたゆまざる情熱と、努力と、心の若さがなくてはなし得ない大事業であります。それだけに今日のこの喜びは貴兄には一生忘れることのできない感激でありましょう。

そしてこのことは、志を同じゅうする私にとりましても大きな喜びであります。かって三池斗争のときおとずれた、針生一郎という作家がこんなことを申しました。

「三池の労仂者には一番、二番の方はあるけれど、考え方という方がない。思想が単一化され、考え方を失った組織の中には、批判を前提とする文学は育たないだろう――」と。

この皮相なる言葉には、私は忠言としてすなおに受取れぬ抵抗と怒りを感じたものでした。その砂漠のように思われた三池労組に、かくも見事なる詩集「石路の花」が咲いたのであります。このことは第二、第三の労仂文学の花が咲く可能性を貴兄が見事に示してくれたものであり、私はこの詩集で針生氏のホッペタをひとなでしてザマーみろとさけびたい衝動にかられました。

このことは決して憎悪の感情からではなく、三池に「石路の花が咲いた」という喜びの精一ぱいの表現からであります。私が貴兄とお会いしたのは、今日で二度ですねえ。最初にお会いしたのは、青年部の沖縄派遣カンパ講演会の会場でした。山下次長に貴兄を紹介されて私はおどろきました。貴兄の詩でたえず描いていた貴兄のイメージと実物が、あまりにもかけはなれていたからであります。

時代ばなれのしたハンチングをかぶり、停年に程近いソボクでボクトツなる貴兄の姿は、リヤカーでも引かせ、たんぼのあぜ道にでも立たせたら、田舎の百姓のオヤジそのものでした。私はあえてここで失礼とは申し上げません。それは貴兄の詩に、若い生命を感じ力を感じ、愛情の泉さえ感じさせた、貴兄の作品の責任によるものと考えるからです。

私の娘は、貴兄の詩と私の抵抗日記を、女の表情にたとえてこんなことを申しました。「高椋さんの詩は暗い台所でツケモノ石を額に汗をしてかえている女の表情であり、お父さんの抵抗日記は涼しいえんがわで生花を楽しんでいる女の表情である」と、鋭い批判をしました。ずばりの表現だと思い、冷汗の流れる思いをしたものです。

坑内の暗い坑木の上で、差別に泣きながらキャップランプの光で書いた抵抗の詩、畳をふきふきほとばしりでた愛情の詩、仲間の死に怒り狂った涙の詩など、魂と心で書いた作品と、頭だけで書いた作品の違いを娘は指摘したのではないでしょうか。こよなく妻を愛し、だれよりも人間を愛し、そして組織を愛する高椋さん、どうぞこん後も心の温まる詩を、愛と抵抗を生命とする詩をたくさん書いて下さい。私たちの心の支えのためにも……。